

第4章

第一言語習得・第二言語習得



1

第一言語とは… **母語** (生まれてから最初に習得した言語)

第二言語とは… **第二言語習得**

- ① 母語の次に習得した言語
- ② 学習する言語が話されている国で、生活の手段として使う言語

第二言語としての日本語 (JSL)

2

第4章

(1) 第一言語習得理論




3

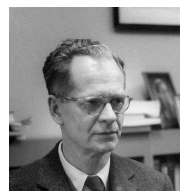
第一言語習得

VS

ノーム・チョムスキー (1928-)	スキナー (1904-1990)
言語学	行動主義心理学



by wikipedia



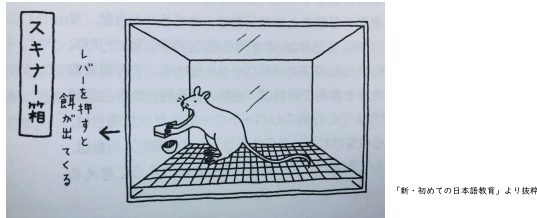
by wikipedia

4

「習慣形成理論」 by スキナー (1957)

第一言語習得の過程

周囲からの ⇒ ⇒ ⇒



オペラント条件付け (道具的条件付け) の実験

5



by wikipedia

言語を獲得するのに重要なのは、刺激ではない。

だ。 VS スキナー

- ・ 子供が大人から受ける情報は、不十分で誤りを含んだもの
- ・ 子供が言い間違えても、常に訂正されるわけではない

⇒ by プラトン (古代ギリシャの哲学者)

では、なぜ子供は大人と同じ文法を習得できるのか？

6

「生成文法理論」 by チョムスキー (1957)

生まれながらにして人間の脳には、
が備わっている。



- ・ 言語により **設定を変える** ことできる
- ・ 子供は設定を母語にすることで、母語の **を** 獲得する

7

京都大学 堂長 研究 所 チンパンジー アイ より



マイケル・トマセロ (1950-)

VS チョムスキー

言語習得は、

子供は

を通して言語を習得する



(2000)

10

「用法基盤モデル」 by トマセロ (2000)

- ① …大人が手や指で物を示し、
子供の注意を向けさせる行為
- ② …大人の意図を理解する
- ③ …ことば(音)と意味を関連付け、
規則性を見出す



11

第一言語の習得順序の研究 by ロジャー・ブラウン (1973)

子供は で第一言語を習得する
(英語 現在進行形-ing ⇒ 複数形-s ⇒ 動詞の過去形…)



- ・ 「自然(習得)順序仮説」 by クラッシュェン
- ・ 「創造的構築仮説」 by デュレイとバート

12

< 第一言語習得理論と教授法 >

19c ()

⇒ 幼児が母語を身に付ける過程を観察して生まれた

1950-60年代

⇒ 「**習慣形成理論**」(スキナー)の影響

1960年代

⇒ 「**生成文法理論**」(チョムスキー)の影響

13

1960年代~70年代



1980年代

⇒ 基盤となったモニターモデルの1つ

⇒ ブラウンの第一言語習得の影響

14

第4章

(2) 臨界期仮説



16

「臨界期仮説」 byレネバーグ (1967)

- ・人間には、がある
それを過ぎると母語話者並みに言語を習得することが困難になる
- ・(諸説あり)

：もともと右脳と左脳の役割は決まっていない
12歳頃から異なる機能をつかさどるようになる

17

第4章

(3) 第二言語習得理論

< 習得順序 >



19

ブラウンの影響を受けて…

byクラッシュェン (1980年代)

※モニターモデル (第二言語習得に関する 5つの仮説) の1つ

- ・文法規則は、
- ・その自然な順序は、

21

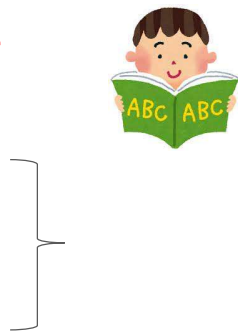
デュレイとバート

ブラウンの影響を受け、第二言語学習者の習得順序を研究

⇒ **第一言語と似たような順序を発見**

第二言語の習得において、

- ・
- ・



22



by Paderborn University HP

ピーネマン (1951-)

ドイツ語の習得順序を研究

⇒

という順で

(1998)

① 言語習得には

(単純→複雑)



23

「処理可能性理論」 (1998)

② ある段階より

を指導すると

習得を促すことができる



：学習者は、**段階を飛び越えて**習得することは**できない**

：教師は、学習者の段階を見極め、それに沿った指導をすることで**効率よく習得を促す**ことができる

24

※**習得**順序：

ex. **現在形**⇒**現在進行形**⇒**過去形**…

発達順序：

ex. **現在進行形**の否定⇒疑問⇒過去

25

第4章

(3) 第二言語習得理論

< ノン・インターフェイス、
インターフェイス >

26

モニターモデル(第二言語習得に関する5つの仮説)

①習得－学習仮説

クラッシュェンは

「習得」⇒ 自然に無意識的に 言語を身に付けること

「学習」⇒ 意識的に言語を学ぶこと



27

27

ノン・インターフェイスの立場

(習得－学習仮説)

VS



28

学習した知識が無意識的、自動的に出てくるようになる

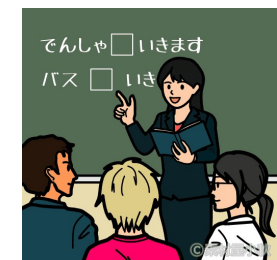
=

・学習して意識的に身に付けた知識 =

例) 外国語の文法・発音

・無意識的で直感的な知識 =

例) 母語の文法・発音



29

第4章

(3) 第二言語習得理論

< インプット >



30

モニターモデル (第二言語習得に関する5つの仮説)


④インプット仮説

第二言語は を

大量に浴びることで自然に習得できる


VS

スウェイン、ロング、シュミット



31

by University of Barcelona HP



メリル・スウェイン (1944-)


第二言語の習得には、インプットだけでは不十分

が必要

⇒ アウトプット

↓

(1985)



32

「アウトプット仮説」(1985)

アウトプットにより…

- ①相手の反応 (フィードバック) を見て、確認できる
- ② のギャップに気づく


⇒すると、 ようになり、

ようになる。

その過程が習得を促進する。

33

by University of Barcelona HP



マイケル・ロング (1945-2021)


学習者は の中で、

が起ることにより に注意が向いたり、

。⇒ 習得が促進される。


↓

「インターアクション仮説」 (1983)



34

「意味交渉」 (コミュニケーションがうまくいかなかったときに行われるやりとり)



- ① : 相手の発話が**不明確で理解できない**とき、もう一度**はっきり言う**よう要求
- ② : 相手の発話を**自分が正しく理解**できているか
- ③ : 自分の発話を**相手が正しく理解**したか

35

II) タスク中心の教授法 (TBLT) by マイケル・ロング


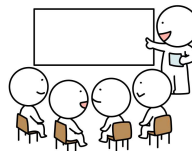
コミュニケーション活動・意味重視

&

必要に応じて、学生の注意を言語形式に向けさせる指導法

↓


フォーカス・オン・フォーム (Focus on Form)

36

36

by National Foreign Language Resource Center
University of Hawaii at Manoa



リチャード・シュミット (1941-2017)


・ ただインプットするのではなく、そこに含まれる に が必要

・ インプットの中で、 ものを「 」と呼ぶ

・ インテイクしたものは、 につながら

↓

(1990)



38

第4章

(3) 第二言語習得理論

<誤用訂正 (訂正フィードバック)>



～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

①「昨日は寒いでした。」 **違います**。「寒かったです。」

⇒



40

41

～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

②「昨日は **寒かったです**ね。」

⇒ 間違いをはっきり指摘せず、間違いに

返事の中で正しい答えを言う



～誤用訂正の例～

学生A「先生、昨日は 寒いでしたね。」

③「昨日は寒い“**でした**”？」(繰り返し)「昨日は **寒…?**」(誘導)

「“寒い”は**I形容詞**ですよ。」(メタ言語的修正)

「もう一度言ってください。」(明確化要求)



42

43

第4章

(4) 誤用研究



47

<対照分析研究>

1950 - 60年代

学習者の

を研究

【背景】

オーディオリンガル・メソッド (正確さ重視)

⇒



48

<対照分析研究>

：今まで身に付けた言語が、第二言語習得に
影響を与えること

の転移：いい影響を与えること

の転移：悪い影響を与えること

▼ 母語が悪い影響を与えること

49

対照分析研究の問題点

・母語と目標言語の違いから、色んな予測を立てて研究したが、
予測通りの結果にならないことが多かった

・

ことがわかった



対照分析研究は衰退、誤用を分析する研究が始まった

50

誤用の捉え方の変化

<対照分析研究> 1950 - 60年代

学習者の誤用は



<誤用分析研究 (byコーダー)> 1960年代後半-70年代

学習者は誤用を産出しながら、自分の発話を修正していく
だから、

51

<誤用分析研究> byコーダー

: 単なる言い間違い

本来は正しく使えるが、疲れや緊張から起こる誤り

()

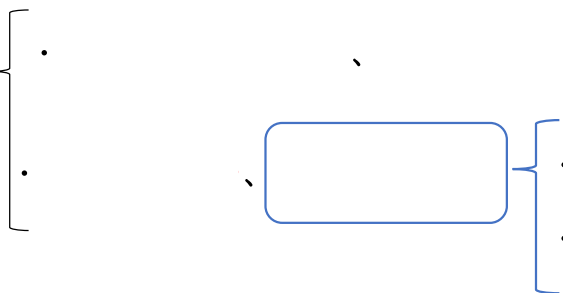
: 学習者が繰り返し起こす誤り

()

52

<誤用分析研究> byコーダー

エラー



53

例① わたし、沖縄、んー、楽しいです。

:
コミュニケーションに 誤り

例② わたしは去年沖縄へ行きます。楽しいでした。

:
コミュニケーション上、 誤り

54

例①中国人の学生の作文「きのう、わたしの生日でした。」

アメリカ人の学生の発話「アンナはうれしかったです。」

： による誤り

例② きのうは寒いでした。 わたしは背が長いです。

： 学習者の
目標言語の発達途上で起こる誤り

55

言語内エラー

- ・ **適用できないところにまで適用してしまうこと**

例) きのうは雨でした。 寒いでした。

- ・ **言語規則を簡略化してしまうこと**

例) 「トム、コンビニ。」

56

誤用分析研究の問題点

- ・ (文法的には正しいが不自然な表現、など)
- ・ により誤用が出ないことがある

間違いを最小限に留めようとする

誤用分析研究は衰退、 の研究が始まった

57

学習者は文法的には正しいが、 を
してしまうことがある。

<主な原因> **自国の社会文化**を適用してしまう。



59

<中間言語研究> byセリンカー

1970年代前半～80年代

誤用だけでなく、

中間言語：

母語でも第二言語でもない、その中間に位置する
(各学習者の **現時点での第二言語の能力**)

61

中間言語の特徴

- ・ 目標言語に近づいていく
- ・ 発達過程で **起こる**

化石化 :
(定着化)

U字型発達 :



62

中間言語の U字型発達



63